

中欧2006年夏

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学国際教養学部

(2006年10月5日 受理)

1) ベルリンの神聖ローマ帝国回顧展

2006年の夏はドイツの至る所で神聖ローマ帝国の解散200周年を記念する行事が開かれていた。首都のベルリンでも目抜き通りウンター・デン・リンデンに所在するドイツ歴史博物館で神聖ローマ帝国を懐古する大展示会が開催されていた。ドイツ歴史博物館はプロイセンの旧王宮近くにあつて当時は兵器庫として使用されていた建物であるが、その後は靖国神社の遊就館の様な軍事博物館となっていた。第2次世界大戦後は東独の歴史博物館となり共産主義の宣伝を行っていた。

1990年のドイツ統一後は東独的観点からとは全く反対の展示が行われている。建物も本館が改装され、別館も増築された。本館では常設展示、別館では特別展示が為されている。今回の神聖ローマ帝国展は別館で開催されている。サッカーのワールド・カップの熱狂の名残かドイツ国内では国旗が住居や自動車に掲げられているのをしばしば目にした。また、これらの展示会の内容から判断すると統一後の民族的な自信の回復が見られ、民族の歴史を国民に教育する事で民族意識を発揚しようとする意図も若干見られたのである。

展示自身は歴代の神聖ローマ帝国皇帝の治世を原資料で説明しており非常に高い水準である。これら原資料はドイツ国内のみならず、長期にわたり神聖ローマ皇帝の本拠地であったオーストリアからも多数出品されていた。たとえば、神聖ローマ帝国の運命を決めた1648年のヴェストファーレン条約の各国代表署名済の文書が展示されていた。

神聖ローマ帝国とはドイツ国民にとってどんな意味を有するのだろうか。ヒトラーのナチス・ドイツが第3帝国と呼ばれ、鉄血宰相ビスマルクの功により建国されたプロイセン・ドイツ帝国が第2帝国と呼ばれるが、神聖ローマ帝国こそがドイツ第1帝国と呼ばれているのである。

神聖ローマ帝国 (Sacrum Romanum Imperium Nationis Germaniae) はハインリッヒ1世からドイツ国王の地位を継いだ息子のオットー1世がローマ法王の権威を利用して既に崩壊していた西ローマ帝国皇帝のタイトルを復活させた事で始まった。彼が皇帝に即位したのは962年の事である。1034年にはローマ帝国と言う名前が確定し、1157年にはキリスト教の権威を誇示する為に神聖ローマ帝国と改称された。更にはドイツ人意識が明瞭になって来た事から15～16世紀には「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」と改称されたのである。

「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」はドイツ的ではなく、神聖でもなく、ローマとも関係がない、名称と内実が齟齬する奇妙な存在であったと言われる。領域にドイツ民族以外の他民族をも内包していたので純粋にはドイツ的ではなかったし、世俗的な勢力が皇位を保持していたので神聖でもなく、ローマも領域内には無かったからである。

西洋封建社会では諸侯の権力が強大でしばしば王権と対立するのであるがドイツに於いても例外ではなかった。特に皇帝の血筋が絶え後継が決まらなかった大空位時代の後の1273年に諸侯に推戴されハプスブルク家のルードルフ1世が皇位についてからは特にそうであった。その後1356年以来皇帝を選ぶ権限を有する7人の諸侯が選帝侯として強大な権力を持つ事になる。更に宗教改革による新旧教の対立により皇帝の権限は益々制限される事となり、1618年から1648年までの30年戦争の終結の際に締結されたヴェストファーレン条約により諸侯が主権を持つ事になるのである。室町幕府末期の足利將軍の様に皇帝と言っても直轄の領地以外には統治権を行使できない様な状況となったのだ。

室町幕府を最終的に解体したのは織田信長であるが、神聖ローマ帝国に対してはナポレオンであった。本来ヨーロッパに皇帝は1人しかいない筈であるのに、1804年にナポレオンはフランス皇帝に即位する。神聖ローマ帝国最後の皇帝フランツ2世は身の危険を感じハプスブルク家の領地を支配する世襲制のオーストリア皇帝と言う称号を創設し、オーストリア皇帝としてはフランツ1世となる。事実上ハプスブルク家が世襲化していたとはいえ神聖ローマ帝国皇帝は選挙によって選ばれるのであるから、世襲化することによってしかナポレオンの強大な権力には対抗できなかったからである。1806年にはナポレオンがドイツ西部のハプスブルク領を没収しバーデン辺境伯領と合併させバーデン大公国を誕生させ、ライン河周辺内外の諸邦をライン連邦としてナポレオンの支配に置き最終的にはオーストリア、プロイセン、ナッサウ、ブラウンシュヴァイクの4邦以外の全ドイツ諸国がライン連邦に加盟し、神聖ローマ帝国の内実が無くなったので、最後の皇帝のフランツ2世は神聖ローマ皇帝を退位するのを正式に決めたのである。彼の皇帝の肩書きはオーストリア皇帝だけになったのだ。

ナポレオン没落後の1815年にはウィーン会議が開催されフランスの王政復古に見られる様に基本的には旧体制に戻ったのであるが神聖ローマ帝国は復活しなかった。ドイツ諸邦にはハプスブルク家のオーストリアと並んでホーエンツォレルン家のプロイセンが勃興していたからである。神聖ローマ帝国の代わりに設置されたのはオーストリアを議長国とする独立主権国家の連合組織であるドイツ連邦である。

1848年の3月には民主主義と民族主義の革命が起こる。その際にフランクフルトに国民議会が召集されプロイセン国王を元首とする統一ドイツが決議されるのであるが、革命派を嫌ったプロイセン国王はその決議を拒絶するのである。革命が退潮すると再びドイツ連邦が復活する。しかしながら両雄並び立たずという諺ことわざがあるようにベルリンを首都とする新興プロイセンとウィーンを首都とする伝統のオーストリアの対立は深まるばかりで

あった。折から民族主義が勃興し各国が分立していたイタリアの統一が進展する。ドイツにおいても旧神聖ローマ帝国の版図を総て含めた、即ちオーストリアを含めたドイツ諸国を統一し大ドイツを建国すべきだとする意見と、オーストリアを除いたドイツ諸国、即ちプロイセンを中心とする、小ドイツを建国すべきだとする、両論に分かれて対立するのである。

1864年には住民がドイツ人でデンマーク国王の支配下にあったシュレスヴィッヒ・ホルシュタインの民族解放戦争が起こる。両雄のオーストリアが海軍を派遣し、プロイセンが陸軍を派遣し、協力してシュレスヴィッヒ・ホルシュタインの奪還に成功するのであるが、その統治を巡って両国が対立する。1866年には普墺戦争となる。オーストリアはドイツ連邦の殆んど総ての国と連合してプロイセンと対決するが、プロイセンのモルトケ参謀総長の巧みな戦略と、プロイセン領のルール産業地帯での産業革命進展の結果によって鉄道網と兵器の改善が圧倒的に進んでいた事から、ドイツ諸邦各軍はプロイセン軍に各個撃破される。最後にはプラハ東方のケーニヒ・グレーツの決戦によってプロイセン軍はオーストリア軍を圧倒するのである。参謀総長のモルトケは一気に首都ウィーンの攻略を主張したが、ビスマルク首相がそれを止める。プラハにてオーストリアと寛大な条件で講和を結ぶのである。神聖ローマ皇帝であったハプスブルク家のオーストリアを完膚なきまでに粉砕しドイツ諸邦の反感を買うのは得策でないと判断したからだ。

しかしビスマルクは唯の鼠^{ねずみ}ではない。プラハ条約には重大な条件が付随していたのである。オーストリアは今後ドイツ統一に関して一切容喙^{ようかい}しないと言う条件だ。ビスマルクは直ちにドイツの北方諸国を統合しプロイセン王国を中心とする北ドイツ連邦を創設する。統一によってドイツの国力が勃興する事に対して大きな不安を持った隣国の皇帝ナポレオン3世はビスマルクの策略と挑発に乗って1870年に普仏戦争を始めるがフランス軍はセダンに於いてプロイセンを中心とするドイツ連合軍に破れナポレオン3世は俘虜となる。その事でフランス第2帝政は崩壊する。パリでは民衆の叛乱が起こり有名なパリ・コミュンが成立する。この最中にパリ郊外のヴェルサイユ宮殿の鏡の間にドイツ諸侯が集まってプロイセン国王をドイツ皇帝に推戴する。北ドイツ連邦にオーストリアを除く南ドイツ諸邦が加入しドイツ帝国となるのである。これがドイツ第2帝国であり、1871年の事である。神聖ローマ帝国は完全に過去の存在となってしまったのである。1866年プロイセンに破れドイツ統一から排除されてしまったオーストリアは一体どうなったのか。

2) ドイツから排除された後のオーストリアとそのアイデンティティー

ハプスブルク家男系最後の皇帝カール6世は唯一の息子が早世し、皇族男子にも恵まれず、世継が娘だけとなった。彼は1713年に勅令を発ししハプスブルク家の領地は一体不離であり最年長の娘がハプスブルク家を相続すると宣言した。彼の在世人はどのドイツ諸侯も表立って反対することはなかった。1740年にカール6世が死去し娘のマリーア・テ

レージアがハプスブルク家を相続すると、当時勃興し始めていたプロイセンの国王フリードリッヒ2世(大王)が直ちに異議を唱えハプスブルク家の領土シュレージエンの豊穡な大地を強奪してしまう。また選帝侯たちも1742年にバイエルン選帝侯カール・アルブレヒトを神聖ローマ帝国皇帝カール7世として推戴する。1440年以降は事実上ハプスブルク家の世襲となっていた帝位は原則に則り選挙でバイエルンのヴィッテルバッハ家に移ってしまったのだ。しかし女傑マリーア・テレージアも黙ってはいない。直ちにバイエルン全土を占領してしまう。新皇帝はフランクフルト亡命を余儀なくされる。結局3年後の1845年にはカール7世が死亡し、マリーア・テレージアの夫フランツ・シュテファン・フォン・ロートリンゲンがフランツ1世として神聖ローマ皇帝に即位するのである。その死後は長男のヨーゼフ2世が皇帝となりハプスブルク(・ロートリンゲン)家の神聖ローマ帝国の皇位世襲が復活するのである。

1806年にフランツ2世が皇位離脱宣言を行う事で既に事実上は形骸化していた神聖ローマ帝国が名実共に消滅したのは以上で述べたところであるが、彼がその2年前にオーストリア帝国皇帝フランツ1世として即位していたが、そのことは何を意味していたのか。現在の国名で言えばオーストリア、チェコ、スロヴェニアの全部とポーランド南部、ウクライナ西部、イタリア北部の一部、更にはハンガリー、スロヴァキア、クロアチアの全部とルーマニア、セルヴィアの一部がオーストリアと言う名でオーストリア皇帝に統治される事に成ったのである。オーストリア、チェコ、スロヴェニア、イタリア北部は旧神聖ローマ帝国の領域であったものの、それ以外の部分は領域外であり、ハプスブルク家の全領土住民のドイツ人比率は20%程度でしかない。多民族国家としての性格が明瞭に成るのである。

1866年に普墺戦争に敗北してからはドイツ連邦の後ろ楯も無くなり、僅か20%のドイツ民族が残りの80%を支配するのは不可能となり、ハンガリー貴族との妥協を行い帝国の西部をオーストリア帝国、東部をハンガリー王国としハプスブルク家の当主がオーストリア皇帝とハンガリー国王を兼ね、軍事と外交を除いてはそれぞれウィーンとブダペストに別個の政府を置くという再編が行われたのであった。ハプスブルク家の領地が一体不離のものであるという原則からこの様な再編を行ったのであるが、ドイツ民族とハンガリー民族を除いた他の民族には大きな不満を与えるものでありハプスブルク帝国崩壊の可能性を内包するものであった。ドイツ民族の中にも不満を抱きハプスブルク家の所為でドイツ民族統一から排除された言う感情を持つ者達も生じたのである。1889年にオーストリア人として生誕したアードルフ・ヒトラーもその様な思潮の影響を受け反ハプスブルク主義に凝りかた凝固まるのである。ハプスブルク家の為に兵役に服するのを拒否し同じ南ドイツのドイツ帝国加盟国バイエルン王国に逃亡する。(ヒトラーが兵役忌避をしてバイエルンに逃亡したのは臆病であったからではない。1914年に第1次世界大戦が勃発すると直ちに志願兵としてバイエルン軍に入隊し以後4年にわたり勇敢に戦いドイツの金鷄勲章にあたる鉄十字

章を2回も授与されている。また1938年にドイツ総統としてオーストリアを合邦するとハプスブルク家の人々を徹底的に弾圧している。) 結局このオーストリア・ハンガリーは1918年に第1次世界大戦に敗北すると帝国内の各民族が四分五裂して崩壊するのである。その中でウィーンを中心とするドイツ民族居住地でも革命が起こり社会主義者のカール・レンナーを中心とする勢力がドイツ・オーストリア共和国の成立を宣言する。それまでのオーストリア帝国の中のドイツ民族の国と言う意味である。この共和国憲法の第2条にはヴァイマル共和国の1邦になる事が明記されている。工業の中心地ボヘミアと農業の中心地ハンガリーが離脱してしまつては行政の中心地であるドイツ・オーストリアが自立するのは不可能であったからだ。他方ドイツ帝国に於いても革命が起こる。ヴァイマル共和国が成立し、その憲法もドイツ・オーストリアを連邦の1邦として迎え入れるとした。

遂にドイツ民族の統一が実現するかに見えたのであるが、そうは行かなかった。敗戦国のドイツを弱体化するためには独逸合邦は好ましくないと戦勝4ヶ国の米英仏伊が猛反対したからだ。ドイツに対してはヴェルサイユ講和条約で独逸の合邦を禁止したし、オーストリアに対してもサン・ジェルマン講和条約で合邦を禁止したのみならず国名のドイツ・オーストリアからドイツを外して、ただのオーストリアとする様に強制したのだ。ドイツ・オーストリアの成立から満20年経たない1938年3月にはヴェルサイユ条約等に反して結局独逸は合邦するがその際に、伊はそのときにはムッソリーニの政府となつておりドイツと友邦関係にあつたから反対しなかつたのは当然だが、英、米、仏が黙認したのはヴェルサイユ条約で民族自決を謳いながら独逸合邦を禁止した事に対する後ろめたさがあつた事も理由となるだろう。現在のオーストリア政府の公的見解は1938年にオーストリアはドイツに占領されたと言う事になっている。しかし、合邦に際しオーストリア出身のヒトラーが故郷に錦を飾った際に皇宮前の広場に集まつて熱烈に歓迎した多数のオーストリア人達を見ると必ずしもそうとは思えない。外国からの干渉の為に実現出来なかつた民族統一が実現した事に対する喜びが表れている面が強い。

しかし独逸合邦は僅か7年で終わった。1945年にドイツが第2次世界大戦に敗れたからだ。英米仏蘇4ヶ国による分割占領は独逸別個に行われた。社会主義者のカール・レンナーを中心として占領下に再びオーストリア共和国が建国された。この共和国は第2共和国と呼ばれる。第1共和国との大きな違いはドイツ民族性の否定である。オーストリアは1938年にドイツに占領された犠牲者なのだという主張である。ドイツ本土と同様に国土のかなりの部分をソ連に占領されていたオーストリアは犠牲者であると強く強調しないとドイツ本国のソ連占領地区と同様にドイツ軍の攻撃で荒廃したソ連の復興の為と言う理由で工場設備等鉄道のレールに至るまで総てソ連に接収され戦争被害が更に拡大したであろうからだ。西独経済に比べ東独経済が大きく遅れたのはソ連による生産設備の略奪が大きな要因の一つとなつたのは自明の事であるからだ。自分たちがドイツ人である事を否定

する為に学校教育に於いてドイツ語という科目が国語という科目に変更されたのもその頃だ。勿論^{もちろん}の事ながら授業の中身は同じであったのではあるが。

1953年にスターリンが死ぬとソ連^{ゆきどけ}の雪解政策が開始されフルシチョフが独逸に対し分割占領の終結と中立化政策を提案する。オーストリアはその提案を受諾し1955年には米英仏蘇と平和条約を結び4ヶ国占領軍は撤退する。平和条約の条件としては独逸合邦の禁止と永世中立国となる事であった。オーストリアとは異なり西ドイツのアデナウアー首相はフルシチョフ提案を拒否した。西部ドイツ(西ドイツ)と中部ドイツ(東ドイツ)は統一できてもオーダー・ナイセ河以東の東部ドイツがソ連・ポーランドに割譲されるのを認めることが出来なかった事とドイツ中立化提案にドイツの共産化の陰謀を見たからだ。西独は再軍備をし、アメリカとの同盟を結び北大西洋条約機構(NATO)に加盟するのである。その事で奇跡の経済復興を果たしヨーロッパ第1の経済大国となったのである。東部国境の問題については1972年にブランド首相の新東方政策により結局はオーダー・ナイセ国境を認めざるを得なかったのではあるが。しかし、この様な政策によって東西ドイツの統一がオーストリアに比べ35年遅れの1990年となった事を思えば、アデナウアーのフルシチョフ提案拒否が本当に良かったのか否かは断言が難しいところである。

今回ドイツ各地での神聖ローマ帝国解消200年記念の展覧会を見た後にウィーンを訪れたのであるが極小^{ごく}な展覧会が宮廷公文書館で開かれているに過ぎなかった。神聖ローマ帝国最後の皇帝フランツ2世が初代オーストリア皇帝フランツ1世と同一人物であるのだからもう少し何かがあっても良さそうであったが、大々的に催されていたのはモーツアルト生誕250周年で観光客の誘致^{よびこ}に躍起となっていた。私がウィーンに駐在していた1991年にもモーツアルト没後200年の記念行事が開催されたが、今回の様に商業主義の魂胆^{こんたん}がそんなに目立ちしはなかったである。今回のモーツアルト記念行事には神聖ローマ帝国解消200年の目晦まし^{めくら}の意図があるのでは邪推させるほどであった。

宮廷公文書館での展覧会は規模が非常に小さかった。それでも私は展覧文書の隅から隅まで熟読したので3時間ほど滞在したのだが、他に来訪者は1人もいなかったところからすれば極めてひっそりとした行事であった。それでも質はきわめて高いものであった。その中でも私の注目を引いたのはナポレオン自筆のフランツ2世(1世)宛書簡であった。女傑マリーア・テレジアの孫であるフランツ2世も数奇な経験の持主である。1792年にフランクフルトの大聖堂で神聖ローマ皇帝に即位したのであるが、その年には1789年のフランス革命が過激化し国王ルイ16世が断頭台の露と消えるのである。その王妃マリー・アントワネットはマリーア・テレジアの娘であるからフランツ2世の叔母に当たる。その夫が処刑されたのだ。マリー・アントワネットもその翌年には断頭台に送られる。フランツ2世はフランス革命への干渉戦争を開始するのだが結局はナポレオンに敗れるのである。ナポレオンは1804年にフランス皇帝に即位するが、1810年には糟糠^{そうこう}の妻ジョセフィーヌを離別し名家ハブスブルク家からフランツ2世の娘マリー・ルイーゼを皇妃として迎え

るのである。したがってこのナポレオン書簡は後の岳父に対する手紙である。手紙でナポレオンは世襲制のオーストリア皇帝にフランツ 1 世として即位したのをお祝いしている。白々しいと言う外はない。ヨーロッパの旧秩序を破壊しオーストリア皇帝と言う新しい肩書きを名乗らざるを得なくした張本人が正にナポレオンであるからだ。

なお、ナポレオンの皇妃マリー・ルイーゼはナポレオン没落後に実家のウィーンに戻る。更にはイタリア貴族と再婚する事になる。ナポレオンと生^なした息子はナポレオン 2 世となるべきであったが母と共にウィーンに行きライヒシュタット公として成人するが若くして没する。毒殺されたという説もある。王政復古したフランス王国も 1830 年の 7 月革命でブルボン本家からブルボン傍流のオルレアン公ルイ・フィリップに代わるが 1848 年 2 月革命で王政は崩壊し第 2 共和国となる。1851 年には大統領でナポレオンの甥であるルイ・ボナパルトがクーデターを起こし、1852 年にはフランス皇帝に即位し第 2 帝政が始まる。彼がナポレオン 2 世ではなく、3 世と名乗ったのはライヒシュタット公の^{せい}所為である。ライヒシュタット公はウィーンに葬られていたが、1940 年にドイツがフランスを破ってパリを占領した時にヒトラーがパリを訪問した。彼は廃兵院にナポレオンの^{ひつぎ}棺を訪ねたが、一人寂しく眠るナポレオンを哀れに思いライヒシュタット公の^{ひつぎ}棺をウィーンからパリに移させた。二人は今もパリ廃兵院ドームの下の^{ひつぎ}並んだ棺の中で眠っている。

宮廷公文書館の展示は質的にはこの様に素晴らしいものではあったが何分量に於いては非常に寂しかった。館長の A 教授に不満を漏らすと丁度翌週から首相官邸内で内々に開催されるオーストリア展を参観出来る様に図ってくれた。オーストリアが 2006 年の前半に欧州連合 (EU) の議長国を勤めた際にブリュッセルの本部内に展示して欧州各国首脳に展示したものをウィーンの首相官邸内でオーストリア政府閣僚等にも示すためであった。安全上外国人に一人で自由に参観させる訳には行かないので N 博士ともう一人の官邸官僚が私に付きっ切りで案内してくれた。自由に行動できないので多少は^{わずら}煩わしくはあったが、彼らが展示物の一つ一つを非常に丁寧に説明してくれたのでなかなか面白かった。たとえば EU の共同国歌はベートーベンの第九交響曲の中の歓喜の歌であるが、ベートーベンをオーストリアの作曲家として紹介しベートーベン自筆のその音符を展示していた。ベートーベンはライン河畔のボンの町で生まれたが、作曲家として活動したのは主としてウィーンであるからオーストリアの作曲家と言って良いのであるがドイツの作曲家でないとは言えないであろう。現にドイツが東西に分割されていた頃にオリンピックに東西合同の選手団を派遣した際に国歌の代わりに用いたのはこの歓喜の歌なのだから。オーストリアが他のドイツ諸邦のバイエルンとかザクセンとは違ってドイツでないと主張しなければオーストリアがドイツから独立に存在しているのだというアイデンティティーが得られないが、歴史的、文化的に見てそれは非常に難しいところがある。1990 年 10 月 3 日の東西ドイツの統一の日に私はウィーンにいたのだが地下鉄の中で以下の光景を見た。1 人の若い男が^{よっぱら}酔払って以下の様に叫んでいるのを。「親父もお袋もオーストリア人だが俺は

オーストリアが大嫌いだ。俺はドイツ人なのだ。』

この男の様な例は現在のところ少数派であろう。なぜなら戦後60年オーストリアはドイツではないのだと学校で教育してきたからだ。もしそうならばオーストリア人はドイツ人ではない。するとドイツ人ではなくオーストリア人であった、つまり外国人であったヒトラーがどうしてドイツの宰相や総統になれたのかと言う疑問が起こる。右翼のヒトラーのみならず、左翼でも名著『金融資本論』で有名なオーストリア人ルードルフ・ヒルファーディングもヴァイマル共和国では大蔵大臣を務めている。オーストリア側の民族アイデンティティー確立の必死の努力が、オーストリアがドイツの一部であり、皇帝を擁してウィーンがその首都であったという事実を思い起こす事になる神聖ローマ帝国解消200年を盛大に記念しなかった事の底流であろうと私は思った。神聖ローマ帝国を強調する事は大ドイツ主義を強調することになり、1938年にヒトラーが実現した大ドイツ国を思い起こす事に繋がり、独逸合邦に歓喜した祖先を思い出させることになるからだ。第1次、第2次オーストリア共和国建国の父であるカール・レンナーでさえも、独逸合併後にヒトラーが英仏の同意を得てミュンヘン会議の結果チェコスロヴァキアを解体しドイツ人居住地区ズデーテンランドを大ドイツ国に併合した事を支持したのだから、そんな事実は忘れてしまいたいに決まっているからだ。

3) ドイツ民族主義復活の底流

それに反してドイツ側で神聖ローマ帝国を大々的に懐古したのは底流に民族主義の復活があるのではなかろうか。東ドイツが存続した事も否定的に捉え西ドイツ中心の歴史を確立しようと努めている様に見えるのだ。戦後ドイツは4ヶ国に分割占領されたが、首都ベルリンも4ヶ国に分割占領された。ベルリン市は20区からなっていたが、都心を含む8区がソ連、6区がアメリカ、4区がイギリス、2区がフランスに統治された。最初は20区を共同統治すべく米英仏ソの4ヶ国で共同理事会を組織していたが、1948年に都心にある市役所がスターリン主義者達に占拠されたのを機に米英仏占領の12区が西ベルリン、ソ連占領の8区が東ベルリンと分割されてしまった。それでも1961年までは境界に壁はなく略自由に行き来できたのだが、その年に若年層の西側への流失に国家瓦解の危機を感じた東独の独裁者ウルブリヒト社会主義統一党第一書記が悪名高いベルリンの壁を構築し東西ベルリンの交通を略遮断したのだ。このベルリンの壁は永続するかに見えたが1989年に開放され、東独も消滅してしまった。壁も永続しなかったがウルブリヒトの権力も永続しなかった。1971年にはホーネッカーの宮廷革命で第1書記の座を追われ、国家評議会議長と言う名誉職だけに棚上げされ失意のうちに死んだ。死後はベルリン東部の革命墓地に葬られ1918年ドイツ革命の英雄で1919年に右翼により殺害されたローザ・ルクセンブルク、カール・リープクネヒトの墓と並んでいる。2003年の夏その墓地を訪ねたが、ローザとカールの墓には沢山の花が捧げられていたのに、ウルブリヒトの墓には「縁故者は名

乗出よ、さもなくば無縁墓地として整理されてしまうだろう」という告知の札だけが貼られていた。独裁者の末路は哀れなものである。あの墓は現在どうなっているのだろうか。

とにかく戦後のベルリン都心はソ連に占領されていた。そこにはブランデンブルク選帝侯からプロイセン国王となったホーエンツォーレルン家の居城がありベルリンのシンボルであった。戦災に逢い外壁だけとなってはいたが金さえかければ修復は可能であった。ところがスターリン主義者ウルブリヒトは 1950 年にドイツ・プロイセン軍国主義のシンボルである王宮は残すべきでないと主張し、爆破させて、敷地をマルクス・エンゲルス広場と改名し、革命的労働者の集会の場所とした。1976 年にその敷地の一角に共和国宮殿と称する巨大な建物を建設し東独議会とかレストランとかカフェーとか劇場の複合施設として東独のシンボルとなっていた。1990 年の両独統一（実態は法律的に言っても西独による東独の吸収合邦であったのだが）後は西独側の東独に対する恨みがこの建物に向けられた。アスベストの危険があるという理由で直ちに閉鎖された、東独の国章を外された^{うっ}虚ろな表情でベルリン都心に空しくその廃墟をさらしていた。取壊して旧王宮を再建しようとする市民運動もあったが、両独統一後の経済不況に悩んだドイツでは必要とされた巨大な金額の資金を調達することは出来なかった。廃墟は統一後の 16 年間衆目に晒されて来たのだ。この共和国宮殿の取壊しが遂に始まった。その跡地に王宮が再建されるのかと聞いてみたら、そうではなくフンボルト（ベルリン大学の創立者たる科学者兄弟の名前）・フォーラムと言う建物が建設され、しかも建物の基礎は共和国宮殿のものをそのまま破壊せずに利用するとの事であった。それを聞いて若干あきれた。王宮再建の為に共和国宮殿を破壊するのなら理由は納得できるが、跡地に似たような建物を建てるのは不合理ではないか。それなら共和国宮殿からアスベストを撤去し改装するほうがよほど経済的ではないかと思ったからだ。しかし、ここに外国人には理解できない西独人の東独に対する恨みの心情が表れているのだと思ったのだ。

この共和国宮殿の解体工事の写真を撮影している際に 1 人の初老のドイツ人 P 氏が話しかけていた。彼は西独出身の西ベルリン人だったそうだが自称社会主義者だそうで工科大学出身の技術者であったそうだ。生まれは東プロイセンで戦後西ドイツに避難したとの事だ。ドイツ降伏 1 日前の 1945 年 5 月 7 日の生まれだそうだ。私より若干若い^{ほぼ}が略同年代なので話が合った。統一後のドイツ政府の政策には全く不満であるという。例えば莫大な費用を掛けて壮大なベルリン中央駅が完成後丁度 100 日であったが、あんなものはベルリン市民には関係ない。議員達が自分達の利益の為に建設しただけの事だ等と主張した。彼の恨み辛みを聞いてやっていたら 2 時間以上経って薄暗くなって来た。それで現場を去って目抜通りのウンター・デン・リンデンを語らいながら並んで歩いた。日本で言えば銀座 4 丁目交差点にあたるフリードリッヒ通りとの交差点で分かれた。彼はブランデンブルク門方向に向かい、私はフリードリッヒ・シュトラセ駅方向に向かう予定であったからだ。

この1等地の角に東独時代のあまり冴えないホテルのホテル・ウンター・デン・リンデンが所在していたが、これも取壊し中だった。こちらは政治的理由と言うよりは経済的な理由からだろう。これも歴史的な事象だと思い写真を撮影していると、一度は別れたP氏が急いで戻って来た。何だろうと思ったら、背中のリュックサックを開いて大型一眼レフカメラを取出した。東独の名機ペンタコン社製のプラクチカ BX40 だ。レンズは伝統あるカール・ツァイス・イェーナ社製だ。私に呉れると言う。日独親善の為にだと言う。経済的価値がどれほどあるのかは分からないが、^{わざわざ}態々引き返して来てまでカメラを私に呉れたその心が嬉しかった。

神聖ローマ帝国解消 200 周年の他にベルリンで祝われていたのは「三文オペラ」で有名なドイツを代表する劇作家にして詩人であるベルトルト・ブレヒトの没後 50 年であった。ブレヒトが拠点としたベルリーナー・アンサンブル劇場には世界各国の劇団が集まり日替わりでブレヒトの戯曲を競演していた。日本からも劇団が参加し日本語で公演を行った。ドイツ文学者達も世界から集まっていたが、大阪外語大の I 教授、早稲田大の M 教授、明星大の O 教授等とドイツ・ベルリンの現状について議論をした。その際に話題となったのはドイツを代表するノーベル賞作家ギュンター・グラスがその近著で彼がナチス武装親衛隊員であった事実を告白した事だ。元ポーランド大統領でポーランド民主化運動の指導者であったワレンサ氏はグラス氏の生誕地であるダンチヒ（現在はポーランド名でグダンスク、ワレンサの連帯運動発祥の地）の名誉市民号を返上すべきだと激怒したが、ドイツ市民の反応は必ずしもグラス氏に否定的ではなかった。こんな反応もドイツ人が過去を全否定せず民族的誇りを再び抱き始めた証左ではないのだろうか。グラス氏はドイツ敗戦時には 17 歳であったとの事だが、現在のローマ法王ベネディクト 16 世と同世代だという。このグラス氏の近著によれば敗戦後バイエルンの米軍俘虜収容所でグラス氏とベネディクト 16 世と一緒に暮らしたそうだ。ベネディクト 16 世もヒトラー・ユーゲント（少年）団員であった事実を法王就任時に批判されたが、致命的な問題とはならなかった事を見ても、ドイツの過去に対する全否定が変わりつつあるのだろう。シュレーダー前首相がイラクへの派兵を断固として拒否できた理由もこの様なバック・グラウンドを見れば良く分かるであろう。

4) 中欧の復活

1938 年にヒトラーが独逸合邦に成功し大ドイツ国を建国し、その後更にチェコスロヴァキア（ボヘミア、モラヴィア、スロヴァキアからなった）を解体しボヘミアとモラヴィアのドイツ人居住地ズデーテンランドを大ドイツ国に併合したことは既に述べたが、その際スロヴァキアはどうなったのであろうか。ヒトラーはスロヴァキアを独立させたのだ。ハプスブルク帝国時代ボヘミアとモラヴィアはオーストリア帝国領であったが、スロヴァキアはハンガリー王国領であった。スロヴァキアの首都ブラチスラヴァ（ドイツ語ではプレズブルク、ハンガリー語ではボズソニー）はハンガリーがその版図を殆んどトルコに占領

されていた時代にはハンガリーの首都であった。1740 年神聖ローマ帝国のカール 6 世が死去しハプスブルク家の男系が絶え遺言で娘のマリーア・テレージアに相続させようとした際にドイツ系の貴族たちは冷ややかであったが、ブラチスラヴァにあったハンガリー議会でマリーア・テレージアがハンガリー貴族たちに向かい支援を訴えると熱狂的な支持が返って来た。それを契機にドイツ系の貴族の支持をも得て、プロイセンのフリードリッヒ 2 世 (大王) やバイエルンのカール 7 世に対抗する戦を起こすのである。肥沃の地シュレージエンのプロイセンからの奪還はならなかったが、バイエルンのカール 7 世に奪われた神聖ローマ皇帝の地位は奪還し、夫のフランツ・シュテファーン・フォン・ロートリンゲンをフランツ 1 世として即位させたのであった。男系が絶え他の諸侯に分割支配される恐れがあった父カール 6 世の版図の殆どを保持した彼女のハプスブルク家への功績は大きいし、この功績に果たしたブラチスラヴァの意味も大きい。

ハプスブルク帝国が崩壊した結果成立したチェコスロヴァキアは妙な国であった。ヴェルサイユ講和会議で米国のウィルソン大統領が民族自決の原則を主張して生まれた国であったが、この国内ではチェコ民族が過半数を占めてはいなかった。ボヘミアとモラヴィアからなるチェコ地方にはチェコ人人口の半数を占めるほどのドイツ人が特にズデーテン地方に居住していた。ウィルソンの原則に沿えば住民投票を行うべきであった。ドイツ領でドイツ人とポーランド人が混住していた東プロイセンやシュレージエンでは住民投票の結果によってドイツ領とポーランド領に分割されたし、ハンガリー領でドイツ人とハンガリー人の混住していたブルゲンラントも住民投票の結果オーストリア領とハンガリー領に分割された。しかしズデーテンランドでは住民投票は行われなかった。この事が 1938 年にヒトラーによるズデーテンランドの大ドイツ国への併合を呼び起こすのである。またハンガリー領だったスロヴァキアにおいてもスロヴァキア人の他に支配階級だったハンガリー人やドイツ人が少数民族として居住していた。チェコ人とスロヴァキア人は同じスラヴ民族で殆ど同じ言葉と話していた。セルヴィア人とクロアチア人も殆ど同じスラヴ語を話すが、正教と旧教、キリル文字とローマ字といった違いが有り激しい内戦を繰り返したが、チェコ人とスロヴァキア人の中にはそれほど大きな相違はなかった。それでもオーストリア領、ハンガリー領と歴史的背景を異にしていたので比較少数派のスロヴァキア人には大きな不満が残った。1938 年にチェコスロヴァキアが解体されチェコ地方がドイツ領とドイツ保護領に分割された際にヒトラーがスロヴァキアを独立させた理由となったのだ。スロヴァキア人の不満を利用したのである。1945 年のドイツ敗北後旧チェコスロヴァキアはソ連軍に占領された。旧チェコスロヴァキアはチェコスロヴァキア共和国として復活するが、ソ連軍の兵力を背景にした共産党のクーデターで中央集権のチェコスロヴァキア社会主義共和国となる。1989 年のヴェルヴェット無血革命で共産党政権が倒れチェコとスロヴァキア連邦共和国となり連邦政府、チェコ政府、スロヴァキア政府の 3 政府体制となるが長続きせず 1993 年に分離するのである。この分離は無血で平和的に行われた。私は分

離直後に自分で自動車を運転してチェコ、スロヴァキア国境を通過した経験があるが真に平穏なものであった。

ウィーンで明治学院大のH教授、東京都立大のN教授、埼玉大のS教授、一橋大のT教授と意見交換を行っていた際にS教授がウィーンの都心とブラチスラヴァの都心の間に水中翼船が就航してわずか75分で両都を結ぶので是非乗ってみたいという話があった。私は1993年のチェコ・スロヴァキア分離の際に自分の車でブラチスラヴァを訪問したことはあるが、その後はなかった。当時の印象では殺伐とした街であった。2004年のEU拡大によってスロヴァキアがどれほど変わったのかを見たいくなり水中翼船の切符を買おうとしたが総て売切れになっていた。それで鉄道を利用した。片道58分で、2等往復料金は14ユーロ(訳2,100円)と安かった。ブラチスラヴァ市内の市電、バス料金を含んでである。ブラチスラヴァ中央駅から市電でドナウ河沿いの旧市街に向かった。街の様子は以前とは様変わりであった。多数のレストランやカフェが林立しており観光客が蝟集していた。食事をしてみたがサービスは良く値段も安かった。古い薬局の建物があり看板の真ん中がスロヴァキア語、左側がハンガリー語、右側がドイツ語で記されていて、ハプスブルク帝国の名残があった。ドイツ語が飛び交っていた。以前とは全く変わっておりスロヴァキアの繁栄が分かった。それを見てから夕方の列車でウィーンに帰った。ウィーンとブラチスラヴァの緊密な関係が復活しているのを見た。一時は言葉だけとなってしまっていた中欧が再び強烈に復活しているのが体感できたブラチスラヴァ訪問であった。

5) 総括

1806年にはドイツ第1帝国たる神聖ローマ帝国が完璧に崩壊し、ドイツ民族の一体性が完全に失われてしまう。ナポレオンの失脚によっても民族の統一は出来ず、ドイツ連邦という極めて緩い結束しか実現できなかった。オーストリアを排除したドイツ第2帝国がプロイセンにより1871年に建国されたが、折から起こったスラヴ民族主義から僚友ハプスブルク帝国を支援するため第1次世界大戦に突入し、結局は心中することとなった。ドイツ第2帝国は崩壊しヴァイマル共和国が成立した。ハプスブルク帝国は瓦解しドイツ民族居住地がドイツオーストリア共和国として建国された。ヴェルサイユ条約とサンジェルマン条約によって民族の統合を阻止されたドイツ民族の不満はヒトラーの民族社会主義を勃興させドイツ第3帝国の成立に至り、一旦は独逸合邦にも成功し大ドイツ国を成立させる。ヒトラーの野望は第2次世界大戦を勃発させ、ドイツ第3帝国は敗北し東部ドイツを失い西部の西独、中部の東独、オーストリアの3国に分裂したのである。西独と東独は1990年には統一する。それから16年経った。その間、EUの拡大によりドイツ民族主義は抑えられるかと思えたが、民族の自信の回復が種々の点で見られる様になっている。将来2006年はその転機と見られるのかもしれない。2006年夏の中欧訪問では世界史の転換を予兆させるものを感じたのである。

Central European Summer 2006

Hajimu WATANABE

*College of Liberal Arts and Science for International Studies
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 5, 2006)*

The year 2006 is the two hundredth anniversary after the dissolution of the Holy Roman Empire of the German Nation. In order to commemorate this occasion, many expositions have been held in German cities.

As far as I know only one small exposition was held in Austria, although the last emperor was from Austria. On the other hand, they celebrate spectacularly the two hundred fiftieth anniversary of the birth of Wolfgang Amadeus Mozart .

What is the reason for the difference in attitudes between these two countries? It appears that a quiet rise in German nationalism has been taking place. At the same time, Austria is trying to establish her own identity independent from Germany. It is probably very important to watch carefully these tendencies.

Bibliography

- 1) Herausgegeben von Hans Ottomeyer, Jutta Götzmann und Ansgar Reiss, *Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation 962 bis 1806, Katalog*, Dresden, 2006
- 2) Herausgegeben von Heinz Schilling, Werner Heuen und Jutta Götzmann, *Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation 962 bis 1806, Essays*, Dresden, 2006
- 3) Herausgegeben von dem Österreichischen Staatsarchiv, *Österreich und das Heilige Römische Reich, Ausstellung des Österreichischen Staatsarchivs*, Wien, 2006
- 4) Volker Rödel, *1806:Baden wird Großherzogtum*, Karlsruhe, 2006
- 5) Carl-Georg Böhme und Kristian Ludwig, *Das Stadtschloß*, Berlin 1998
- 6) Georg Hermanowski, *Ostpreußen*, Augsburg, 1998
- 7) Hugo Portisch, *Österreich I, Die unterschätzte Republik*, Wien, 1989
- 8) Hugo Portsch, *Österreich II Der lange Weg zur Freiheit*, Wien, 1986
- 9) Friedlich Heer, *Das Heilige Römische Reich*, Bern, München, Wien, 1967
- 10) Karl Renner, *Die Gründung der Republik Deutschösterreich, der Anschluß und die Sudetendeutschen*, Wien, 1938, Zweiter Nachdruck 2001
- 11) Günter Grass, *Beim Häuten der Zwiebel*, Göttingen, 2006